

どの子も、笑顔で 生き生きと活動する教室を

武庫川女子大学非常勤講師 曾我 正雄

1 はじめに

はじめる

すぐはじめる

いやいやはじめる

考えてはじめる

見てはじめる

その子なりにはじめる

動きだし

輝きだし

また あした



「はじめる」の詩、いかがでしょうか。新学期、子どもたちは、新しいことと出会うために学校にやってきます。子どもたちは、はじめているのです。

2 幼稚園・保育所の教育内容を知ることから

私たち教師は、子どもたちが幼稚園・保育所でどのような教育を受け、どのような能力を身につけているのかを深く知らず、新一年生に接していることがよくあります。

年長組の子どもたちは、幼稚園や保育所では立派なリーダーでした。自主性も自律性も備わり、自分より小さい子を思いやり、掃除などもできぱきしたりしてきました。幼稚園や保育所文化の担い手であったのです。しかし、小学校へ入学すればピカピカの一年生として迎えられ、四月の下校は早く、給食や清掃は高学年の児童が手伝ってくれるというのがたいいの学校の実情です。そのことはそのことで意義あることなのでしょうが、何だか甘やかしているように思えてなりません。

幼稚園や保育所では、言葉遊びにしても、随分と高度なことを体験してきています。

・一音一字の発見遊び―葉、歯、目、芽……

・二音からできている言葉集め―かい、いか、たこ……

・三音からできている言葉集め―めだか、かじか……

拗音、長音、拗長音、促音だって知っています。しりとりにしても、言葉しりとりまで経験しているのです。

・煙突は高い↑高いは大人↓大人は先生……

このほかに、絵・劇・体育・遊戯など、いろんなことを身につけて入学してきます。これらの能力を小学校教育で生かしていくことが大切です。五月になれば、何人かは皁月病（学校へ行くのを嫌がること）に罹ります。自分の能力が逼塞（ひっさい）してまった表れのように思われます。

3 子どもへの話しかけ、呼びかけ

いややわ

六才

ね

おかあさん

きょうね

こうえんでね

ドッジボールをしたの

ふーん

ぼくね

五人もあてたの

すごいやろ

ふーん

おかあさん

きいてんの

いややわ

ちは満面笑みをたたえて「ぼくね 五人もあてたの すごいやろ」と言うことでしょう。「ほんと、すごいね。次は先生も寄せてね」と言えば、「先生 きいてんの いややわ」ではなく、目を輝かせて「うん いいよ ぼく 先生 あてるからね」と言い、詩も随分と違った喜びに満ちた表現として書かれたことでしょう。

次の詩を見てください。この詩には、感動と喜びがあります。

トンネル

六才

トンネルをつくるの

どんどんどん

すなのあなをほるの

あああ

おちちゃった

あとすこしだったのに

こんどはおともだちとほるの

どんどんどん

すなのお山をほっていくの

あつ

おともだちのかおがみえたよ

すなのトンネル

やったね

それは他愛のない体験だったかもしれないが、書物による知識では得られない自然に対する認識を私に与えてくれた。自然がこの上なく奥深いもの、美しくて微妙であることを、私は生の体験として受けたのである。〜

〈この得難い経験が私にもたらしたものの膨大さにくらべれば、文献を読んで得たものの中で私の仕事に役立ったものの量は、ほんの少しであった——中略——その独創性をはぐくん

背景は少年時代の自然との触れ合いにある、と今の私には明言できる。)

福井先生が言われるように、子どもたちが自然とじかに触れ合う場と時間を意図的につくるのが大切です。

次の詩の子どもとお母さんのやりとりは、そのまま子どもと先生のやりとりである場合もあります。子どもの言葉をどのよう

かにのだっぴ

小学校一年生

おかあさん
ちよっときて

はやく

ね

はやく

どうしたの

いいから きて

ほら

かにが二ひきになってる

かにのだっぴや

ほら

うごいてる

うごいてるやろ

ほんま

すきとおってるな

あかん

いらたらあかん
しんでしまうから

うに受けとめ、どのよう
に投げ返すかで、先生
と子ども人間関係
がつくられていくので
しょう。

先生自身が、実際に
砂場遊びをし、自然の
感触に触れ、感動する
心をもっておくことが、
自然体で子どもと楽し
く会話ができ、ともに
楽しみながら、学級の
質を高めていく基盤に
なります。

言葉遊びや詩を通じ
てじかに感じた感動を
表現し、笑顔いっぱい
で活動する子ども集団
を育てることは、教師
冥利に尽きると言える
でしょう。

4 授業に挑む子どもを育てる

子どもたちが、学校でいちばん長い時間を過ごすのは授業時間です。その授業がおもしろくなければ、充実感や達成感をもつことができず、もやもやとしたものをもったまま四十五分を終えます。学校への魅力も失っていくことでしょう。やはり、学校はわくわく、うきうきして通つてくるところでありたいものです。授業が上手な先生の学級では、生活指導上の問題はあまり起きないと言われています。充実感、充足感があれば問題行動を起こすエネルギーではなく、授業に、教育活動に集中するエネルギーとなって表れるからです。

では、どうすれば「楽しい授業」が展開されるのでしょうか。簡単です。授業を受ける子どもではなく、授業に挑む子どもを育てるのだという意識を指導者もつことから始まります。どうすれば子どもの学ぼうとする気持ちを引き出し、進んで学習に挑む姿勢をつくることができるか、八つの秘訣をここで述べておきます。

(1) 雰囲気があることやかであること

教室内がある硬さを持ち、何となく圧迫感があるところや、反対にざわざわしていて、緊張感のないところではやる気が芽生えにくい。

(2) 学習のめあてがはっきりしていること

それぞれの学習過程で、今学習していることの目標や意味がわかっていることが大切である。

(3) 「やれそうだ」「おもしろそうだ」と思わせること

過去の学習経験や生活経験をもとにしたり、それを想起させたりする導入の指導が大きくものをいう。

5 まとめ

先生のことば

朝の会のことば

下を向いていたら

「顔が青いよ どうしたの」って

額に手をあててくれた

お掃除のとき

雑巾でふいていたら

「いつもがんばってるね」って

頭をなでてくれた

勉強のとき

自信がないけど手をあげて言ったら

「なるほど なるほど」って

うなずいてくれた

先生のことばは

私の心をあたためる

私にやる気を起こさせる

先生のことばは

大きな力

やさしい心

常に、笑顔で質の高い教育を展開したいものです。

上の詩にあるよう

に、先生の力は大きいのです。

ここでは、教育という楽しい仕事を遂行するうえで大切な、三つの「シヨン」を書いておきます。

① ビジョン

(将来への展望)

② ミッション

(使命感)

③ パッション

(熱情・情熱)

この三つの「シヨン」さえしつかりともっていれば、学級経営もうまくいき、どの子ども笑顔で生き生きと活動する教室が誕生します。

この秘訣の上に立って授業実践をすれば、どの子ども生き生きとした笑顔で授業に挑んでくることでしょう。

〔詩の出典〕

『道徳授業技術双書 20 子どもの心に輝きを―先生と親と道徳教育』

藤井喜代美著 (明治図書)